開館五〇周年記念インタビュー

開館当初をふりかえって

上西節雄
（取材）秋山亮・岡﨑有紀

岡山県立博物館は令和三年八月に開館五〇周年を迎えた。それを記念して、岡山県立博物館の開館準備段階から業務に携わり、開館特別展「岡山県のやきもの」などを担当した上西節雄氏に、開館当初のことなどをお話ししていただいた。

秋山：今日はよろしくお願いいたします。まずは、開館準備の頃についてお伺いしたいと思いますが、当時、先生よりずいぶん年上の方が多いですね。

上西：そうそう。オープンの年に前田幹さんとか三好基之さんとか入ってきて。考古とか民俗は入れ替えが激しくて。高橋護さんや柳瀬昭彦さん、岡田博さん。次々入ったり出たりしたよ。

秋山：そうですね。過去の年報とか見ますと、そんな感じですね。

上西：学校から来た人は県博へ入ったり、また学校へ帰ったり。いろいろでした。私なんかはもう一生おれるか思うたら六年で放り出されてなあ（笑）。まあ、教員採用で一応形の上では入っとったからね。ずっと学芸員したかったのにねえ。入った時にはねえ、昭和四五年か。まだ新幹線がついてないんよ。突貫工事やからなあ、県博もあんまりきちっとした建物じゃねえと思うわ。外のタイルなんか次々剥がれて落ちたりねえ。今は古陶館が博物館の裏にありますけど、あれがもっと北にあったり、それから建物の一番北は、もう閉めとるけど料理屋があったりねえ。料理店が一階へ入るとの条件で、建てさせてもろうたんじゃけど。だから、古陶館なんか引っ張ったんよ、後ろへ。家引きが持ち上げて。レールを引いて。入ってまもなく工事というかねえ。設立準備事務局ができて一年半ぐらいでもうオープンしたんやからなあ。

秋山：すごい準備期間が短いですね。

上西：そんな工事はないはずやけどなあ、美術館や博物館で。えらいことしたもんじゃ、本当に。地鎮祭から僕ら見とるからなあ。多分県博に写真が残っとるかと思うんやけど。フィルムとか。「マミヤプレス69」のカメラで大体撮って廻りよったんじゃけど。えらい目して行って写真撮って帰っても、真っ黒じゃったり真っ白じゃったりすることがある。一つ操作誤ったらもう写ってない。写ってないか、感光しすぎて真っ黒になる。で、また行ったり。最初はもう公用車もなんも無かったからねえ、バイクを一台、ホンダのベンリーかな、あれをもらって。岡本明郎さんが運転して、私が後ろへ乗っかって。免許も何もなかったからねえ。乗せてもろうて、県下を結構歩きましたよ。仮の

収蔵庫は朝日高校の古い図書館の建物を借りて、そこへ預けよったんですわ、大きいものはねえ。岡山県総合文化センター（※現在の天神山文化プラザ）地下の守衛さんのおられるところを事務所で借りて、設立準備事務局やったんですけどねえ。そこへ置ききれんでしょう。もろうてきても。高瀬舟の櫂なんか、確か自転車に乗って運んだんじゃないかなあ。長いよ、あれ。

秋山：朝日高校まで、文化センターから結構距離がありますよね。自転車で？

上西：自転車じゃったような記憶が。歩いてじゃあないかと思うんじゃけどなあ。でもまあ、今じゃったら警察に捕まるわなあ。えらいことじゃった。朝日の先生が生徒にお前らも勉強せなんだら、あのおっさんみたいになるぞ、言うて。岡本さんが考古学の出身で、岡大の近藤（義郎）先生のところで発掘なんかしとったから、結構詳しいからねえ。遺跡もいろんなところに連れて行ってもらいました。石川（吉郎）館長はねえ、東大出のエリートというか知識人じゃったから、特にお茶道具が好きじゃってねえ。いろんなコレクターの家、県下を代表するようなコレクターの家とか、骨董屋もちょこちょこ行きました。だから、初期の購入予算が最初の一年間は一億、二年で二億円くれたんですよ。当時の一億円はねえ、結構買い出がしたですよ。一番高いのがねえ、刀剣の「則宗」でねえ。ちょっと先がちびとるいうか、擦り減っとるからねえ。あれが健全じゃったらすぐ国宝になるようなもんですけど。古備前の徳利とかそういうものは何十万円台でくれましたからねえ。結構買い出がして。初期には結構買えて。県博がいろいろものを買うから、市価の値段が上がるんじゃ言われたことがある。岡山市内の骨董屋、皆さん小さいですけどね、骨董屋さんが大事にしとったものを全部つまみ食いしていきました。芋型の徳利だとか、額鉢みな何十万、あるいは百万前後で買えたですねえ。

秋山：当時の百万だから今でいうともっとしますよね。

上西：それはまあそうですけどねえ。今となったら買い物だったと思いますよ。あの緋襷の有名な大皿、なんぼで買うたかな。あれは有名な個人の人が持ってたものじゃからねえ。まあ、後から書類みたら誰から買うたか分かるでしょ。

秋山：分かると思います。それが昭和四五年から四六年にかけてぐらいの頃ですか？

上西：四六年の夏にオープンでしょ。当時県博と後楽園の共通券だったんですよ。確か七〇円か八〇円ぐらいじゃったと思うんやけど。そのうち二割もろうとった、県博が。百万人ぐらいお客さんが入ってましたからね、新幹線が通った時には。そりゃすごい収入ですよ。もう濡れ手に粟というか。アンケートとったら、結局四割ぐらいしか入ってないんですよ。後楽園見たら帰っていく。雨宿りとか、興味のある人が金払っとるんじゃからいうて入ってくれる人もいるけどねえ。総務課の方は楽じゃったと思うよ。全部向こうがしてくれるわけじゃから。その後、後楽園単独で一〇〇円ぐらいにしたらえらい入らんよう

になってしもうて。

秋山：新幹線が通ったのがやっぱり大きいんですか。

上西：新幹線が岡山まで通ったいうのが。で、岡山から向こうへ伸びたらもう途端に来んようになった。

秋山：入館者数の目標が、いま年間五万人なんですけれど。当時の を見ると五〇万越えとか、五〇万に迫る数字がありますね。これは相当入っていたんだなと思いまして。

上西：それは後楽園に入った人全員なのか、その四割の数字なのかちょっと分からんけど。そのへん調べてください。

秋山：そうですね。後楽園が一〇〇万だったら、その四割で四九万とか四四万かもしれませんね。

上西：実際の数字はねえ。でもお金だけはもろうとったから、一〇〇万人から。

秋山：入館者だけでも今の一〇倍は来ています。

上西：常設展だけしかやってない博物館でそれだけ入ってたところは全国で他になかったと思いますよ。まだそんなに各県に無かったからねえ、県博も。

秋山：地方の歴史系博物館の第一号が神奈川県立博物館で、その次が岡山県と。五〇年前の『山陽新聞』に書いてありました。

上西：あそこは（横浜）正金銀行を使って作ったとこかな。古い建物使って作ったところじゃなあ。

秋山：うちは当時でいうと、新たに一から作った歴史系博物館としてオープンしたということですね。

上西：松本組とどこがやったんかな。松本組が主にやったからねえ。

秋山：今のまつもとコーポレーションですか。今の改修もそうだったと思います。

上西：そりゃ前が分かっとりゃあね。設計図もあるし。ええかもわからんなあ。

秋山：それを半年ぐらいで作ったんですよね。博物館の建物を。

上西：半年じゃできてないと思うけどなあ。一年半後にオープンじゃからなあ。枯らしたりせんといかんから、早う作れ、作れ言いながら。とてもまだアルカリが抜けんからいうんで、焼き物展で始めたんですよ。これは少々アルカリがあろうがいいけど。

秋山：それを先生が主で担当されたということですね。

上西：まあ主いうか、私もそんな専門じゃなかったけど。趣味で作りよったんじゃ、焼き物を。大学時代、ロクロの会社の陶芸教室へ通うて。半年ほど通うて、まあ何でもできるようになったから、止めるのは惜しい思うてロクロを着払いで送ってもらってねえ。作っとったんです。好きではあったんですけどねえ。学芸員いうのはそう最初から何かの専門家いうのはおらんのんで、仕事をやりながら、新聞記者に聞かれて分からんでは恥ずかしいから大勉強してねえ。それで段々育っていくんで。一応その道では、岡山県下では一番よく知っとる人間じゃないといかんわけやから。それで必死でやりました。当時はね、今は知りませんけど、新聞記者が二階の研究室のところへ来て帰らんのですよ、記事が書けるまで。だから下手すると半日ぐらい付

き合わされてねえ。今はそんな悠長じゃないけどねえ。文化部かなあ。昔はいろいろ面白い新聞記者おったけど。人も多かったなあ、昔は。

秋山：プロフィールを見ますと、ご専門は元々地理学ですか？

上西：そうです。地理で考古学も好きだったもんで。考古学の良い先生もいたから、そういう勉強もしたからねえ。卒論は古代岡山平野の復原について、とかそんなの。先史地理学いうんですかね、そんなことをやったんですけど。

秋山：昔の海岸線をトレースしたりする感じのご研究ですか。

上西：そんなの。縄文の遺跡とか弥生の遺跡あるでしょ。あれで海岸線の変遷なんか。

秋山：今もリニューアルオープンに向けて同じようなことをしています。ところで、当時の資料なんかを見ますと、昭和四五年の二月には委嘱を受けられていたんですか。県博の準備委員会か何かに。

上西：どうじゃろうか。岡山県の採用試験は九月ぐらいに発表があって。そのうちある筋から、岡山県の職員で学芸員資格を持っとる者はおらなんだかと。岡大にもまだそういう課程が無かったから。それでそういう人間がいないと、博物館法に則った博物館にならんから来てくれんか言われて。私も面白そうじゃなあ思うて。近所のおばさんなんかは惜しいことをしたなあ、先生になりゃあええのにいうて惜しがってくれて。給料ちょっと安かったからね、（教員より）公務員の方が。二月からと言うのははっきり覚えとらんなあ。まあ、行くことは決まっとったかも分かりませんけど。だから文化課の主事で入って。県立博物館設立準備事務局の職員を委嘱するという辞令を出されてますねえ。

秋山：学芸員の資格をお持ちだったのは先生だけですよね、当時。博物館の中でも。

上西：そうです。

秋山：そもそもそういう制度がまだ始まってさほど日が経ってなかったからでしょうか。

上西：公立の施設で、私立も含めてたぶん。学芸員に採用された人はいるんですよ、資格ないのに。文化センターの職員で、美術の先生ですけど。彫刻家で。だけど資格を持ってなったのは僕が一号だったと思います。

秋山：準備の頃は文化センターへお勤めだったのですか。

上西：うん、建物を借りて。一部をね。石川館長もあそこの副館長じゃったし。森田平三郎さんは整理課長じゃった人やし。小野田修さんは事務屋ですけどね。

秋山：当時の新聞記事によれば、昭和四五年の採用の時からすぐもう資料の所在調べ、まずどこに何があるかとか、いろいろされてますね。

上西：そうですねえ。それでまあ自分の目で見とかないかんいうことで。まあ、将来岡本さんは考古の担当になるでしょうし、私はまだ何するか分からなんだんですけど。一応いろんなところ

開館直前の学芸課内の様子（昭和46年８月撮影）　画像提供：岡山県立記録資料館

に行かしてもらってねえ。この目で見といた方がええいうことで。バイクに二人乗りして行ったりねえ。まだ公用車がなかったと思うから。どうしよったろうかな、他の人が行くときは。

秋山：実際行って、見て、交渉して、上手くいくこともあればいかないこともあったという感じでしたか。

上西：まあ、まだ最初から貸せえ言う話じゃなくて、何を持ってるか。だから写真撮って寸法とってねえ。カードを作って。そういう作業をしていきましたけど。まあ、そんなにいろんなことができるわけじゃないですけど。それでも結構飛び回ってます。当時の日記を出せば詳しく分かるんですけど、もう見るの大儀なから見てませんけど（笑）。

秋山：そうやって集めて、昭和四六年の八月に開館と。

上西：そうですねえ。

秋山：その当時の写真がでてきまして。

上西：そうですか。ああほんまじゃ。私も若いなあ、まだ。

秋山：工事の様子とか、何か覚えておられることありますか。

上西：工事はまあ、文化センターにあった事務所から経過を見には行ってましたけど、そんなに記憶に残っとることというて無いなあ。博物館の建物はね、地下を昔の地下水路が走っとってねえ。ある時、旭川が緊急放水して慌てたときには、地下の収蔵庫より一段下に機械室があるんですけど、そこへもう水が流れ込んでるところは見ました。滝のように。その時だったかどうか、今の桜がある土手より一メートルぐらい上に水が来たんで

すよ。だから、繋いでる舟なんかもうあの位置でゆらゆらしてた。それでも一応防火防水のマニュアルに沿って、後ろ側、古陶館側から入るところあるでしょう、あそこへ分木いうてこんな大きな板を入れたら、水が入らんようになるんですよ。それを知っとる職員がおったですから、あの時は一メートル三〇ぐらいまで来たかな。それでも水は全然入れなんだですけど。まあ、(博物館を)あんなところに本当は作るべきじゃない。やっぱり、後楽園との相乗効果を狙ったんでしょう。

秋山：平成三〇年の西日本豪雨災害の時も気をもみましたが、過去にもいろいろと大変なことがあったんですね。一時、博物館を別の場所に移転したらどうかという運動があったことを聞いたことはありますけど。

上西：やっぱり建物は重要ですよ。いま、コロナもあって県政も市政も夢がないでしょう。全国の有名な焼き物の所には県立の陶芸美術館の良いのがあるんですよ。それこそ最初は購入予算で一億円くれたのにねえ。当時知事だった加藤武徳さん、刀が好きでねえ、僕は「則宗」なんか買ってもらうときには、県庁の知事室に行って、刀を抜いたんですよ。見てもらって。好きだからね、個人でも。剣道をやるんですわ。

秋山：せっかくいいものがあるんだから、建物をもっとよくしないとというのは来館者のアンケートにもよくありました。そういえば、先生は美術館の開館準備もされたのですか。

上西：県立美術館の開設準備室の職員もしました。当時、県博の経験者が私と守安(收)さんと三好さんと三人おりましたからねえ。とにかく収蔵庫はなるべく大きく。展示室は小さくという考え方を三人とも持ってましたから。

岡崎：開館当時にいろいろと資料調査に行かれていたとお話を伺ったんですけど、その頃に一番ご苦労されたこととか印象に残っていることはありますか。

上西：苦労ねえ。まあ当時としたら苦労しよったんじゃろうけど、後になったら良いことしか思いつかん。それでもね、備前焼のコレクターで邑久町にすごい人がいたんですけどね、徳利のこんな破片一個を見せてくれてね。これの完全なものがあったらわしゃなんぼ金だしてもええわ、とかね。本当に備前焼の土味の良さや焼き味のよさがもうたまらなく好きじゃいう人は結構当時いましたね。今そんな人あんまりいないでしょうけどねえ。その人は田んぼ大分売ったんですよ。コレクションするのに。で、その中の良いものを県博の方でつまみ食いしてしまったんで、気の毒だったですけどね。そういうものに対する愛着の強さがものすごうあったなあ。いろんな遺跡も廻ったけど、苦労いうのはもう忘れたなあ。

秋山：素敵ですね。さっき石川館長や森田副館長の名前が出てきましたけど、いままでのお話を聞いてたら岡本さんと上西先生のお二人がペアになって仕事をされていた感じですか。

上西：そうですねえ。あの人と私が一〇歳ぐらい違うと思うんですけど。私が二二で入って、あの人が三〇過ぎでしたかね。

秋山：開館の年に前田さんと三好さんが入られて。

上西：そうですね。一応考古・古文書・美術と担当が揃って。私が備前焼と刀剣で、森田さんが民俗やったですけどね。その後に柳瀬さんか高橋さんじゃったかな。高橋さんも短期ですから、一年おったかおらんかったか。そのあと葛原（克人）さんかな。

秋山：この辺りいろいろ人の入れ替わりが多かったんですね。岡本さんも学校現場へ戻られたんですか。

上西：直接ではなかったと思うんじゃがな。

秋山：人が揃って、いよいよ記念式典をして開館という流れとなりますが、開館前後のことで思い出に残るようなことはありましたか。

上西：あそこの展示は、今みたいに日通（※日本通運）を使ってやることができないんでねえ。お金もないし、やり方も知らんし。大体日通の美術がなかったんですからね。美術は大阪からヤマト運輸を呼んどったんですよ。矢掛の捧澤寺なんかも、仁王像を預かるときに私もついて行きましたけどね。戸板の上に載せてね。横の溝へ落ちたり、足が泥まみれになってえらい目にあいましたけど。

岡崎：あれは開館準備中に？

上西：準備中だったと思うけどなあ。その前後関係はちょっと難しいですね。捧澤寺は井原の方のお坊さんが兼務しとってねえ。向こうにも良い絹本の仏さんがあって。それも寄託しとらんかな。捧澤寺は山門だけでしたからね。だからね、展覧会の前日は徹夜ですわ、いつも。オープニングには学芸員は出たことない。地下の宿直室でみんなばったり倒れて。他の者でオープニングしよったです。総務課とアルバイトで。日通の美術がなかったんで。

秋山：ちょっと動かすだけで大変ですね。

上西：重い物とか壊れやすい物はプロでないとね。

秋山：運んで夜にキャプションとかも書いていたんですか。

上西：キャプションも当時はどうしよったんじゃろうか。手書きしよったかもわからんで。まあ、三好さんが字が上手じゃったから書いてもらいよったかもわからんけど。僕ら書いた覚えがないなあ。誰かアルバイトで上手な人がおってお願いしたか。それか看板屋、印刷屋に頼みよったかもわからんなあ。

秋山：そういう風にいろいろとご苦労されたうえでオープニングということなんですけど、その一発目が先程の「岡山県のやきもの」展ですね。当時の記念式典のパンフレットなんかを見ますと、錚々（そうそう）たる方々に来ていただいてます。文化庁やら東京国立博物館やら。加藤知事も来られて、植樹をされたりとか。なんであんな入口のところに木があるのかと思っていたのですが、開館記念植樹なんですね。

上西：そうですか。

秋山：そうみたいでした。この間初めて知ったんですけど。

上西：玄関の前の？

秋山：後楽園の事務所に入る手前に。

上西：あるかなあ。

岡山県立博物館開館記念式典（昭和46年８月撮影）　画像提供：岡山県立記録資料館

秋山：それだけオープニングより事前準備でくたくたになると。

上西：ほんと。まともにオープニングに出たことがない。ああいう施設ができると、どうしても迎賓館みたいな役割があって、皇室の方とかに来てもらうんですけど。私がいたころに、皇太子、今の天皇陛下が来館されたことがありますよ。僕らなんか作業員風の格好しとるから、そこ行こうとしたら警察に呼び止められて。ここの職員じゃ言うて入れてもろうたことがあるけど。

秋山：これも記録を見ると、オープンした翌年に常陸宮様が来られて。その年の冬には三笠宮様が来られてますね。

上西：そうですね、県博へねえ。後の話になりますが、県立美術館へも来られましたね、三笠宮様は。オリエント学会の会長なんかされとって。オリエント美術館へはよう来られたから。その時に、収蔵庫を案内してあげたんですよ。それでオリエント美術館へ帰ってね、あそこ（※県立美術館）の収蔵庫は立派じゃと仰ったらしいわ。

秋山：やっぱり収蔵庫は大事なんで。長期間管理するという上で。ただ、うちも狭くはなるんで、今後どうしたものか困ってます。

上西：他館もそうじゃが、学芸員が使い勝手のいい収蔵庫を持ってるところはほとんどないですわ。

秋山：では、次に展示についてお伺いしたいと思いますが、最近は各室がテーマ別の構成になっていて、通史のところが部屋の半分くらいしかなかったのをもう少し広げようと研究しているところなんです。原点回帰でなるべく岡山県の歴史が分かりやす

い通史展示はできないか、と。

上西：あの頃はね、県博はだいたい明治中期ぐらいまでのものを収蔵展示しようと。やがて美術館ができるから、そこからあとは美術館に任せようと、そういう話もあったんですよ。

秋山：当時の資料を見ますと、四つある部屋の三つが通史展示。一つが焼き物とか刀剣という感じですね。今はなかなか岡山県の歴史が分かりにくいという意見もあるので、改修を機にどうしようかということで。各分野で調整をしているところなんです。

上西：難しいなあ、通史を展示で示すいうのはねえ。平安なんかはほとんどものがないしねえ。通史は年表みたいなものでまとめるか。まあ、基本は実物で見せようみたいな考えをみんな持ってましたからねえ。とにかくコピーや複製じゃなくて、なるべく実物で見せようというのを根本に据えてましたから。その意味では、餓鬼草紙や地獄草紙が岡山から出て行ったのはねえ。特に平安が弱いね。

秋山：歴史にこだわって特定の分野の資料ばかりになるのも、バランスが悪くなるというか。時代配分にしても、古代や中世のものがちょっと弱くなってしまうというのがあったり。文化史を入れようとすると他を削らないといけなかったりとか。そういうことでいま館内で議論してるんですけど。来年には具体的に進めていこうかと思っています。二階のところは主にテーマ展とか特別展とか。そういう意味では、当時の石川館長は、博物館は陳列室になってはいけないということを繰り返し書いていらして。ちゃんと岡山県の歴史が理解できるようにっていうコンセプトで作らんといかんのだ、と。いま響きますね。

上西：三重県なんか県博のいいのを最近作ったでしょう。

秋山：本当は改修の前半期にいろいろ見て回ろうというのがありまして。その時にちょうどコロナが流行してしまって。九州だけ行かせてもらったんですけど。大分県立歴史博物館はテーマ展示みたいな感じでした。もっと近場でも見に行こうかと思っていたら、動いちゃいけないことになって。県外のいろいろな通史展示を見に行こうと思っていたんですが。ところで、先生は焼き物以外に刀剣も担当をされていたんですか？

上西：第四展示室は特別展示室ということで、刀剣と両方やりました。

秋山：焼き物に比べると刀剣は苦労したなあとか難しいとかそういうのはありましたか。

上西：焼き物の方はね、お茶をやる人とか女性にもファンがいましたけど。刀剣の方はね、怖いような人が多くて。だから借りる時にそんなに見ずに借りて、返した時には向こうはよう見るでしょう。ちょっとひけが付いとるとかなんとか言われたことがあります、何回か。もう平謝りするしか。研いだらちびるわけじゃから。それから、借用証を戻してもらうでしょう。それがなかったら「出てきたら破ってください」というのが、代が替わって見つかって、「知らんか」いうて電話かかってきたことがある。私がもう移ってからね。なんか私が盗ったように。そ

りゃあ弱りましたよ。それ以後は借用証が無かったら、確かに受け取りましたいうのを一筆書いてもらってもらわんと。やっぱり投機の対象であったり結構高価なものですからね。刀剣と焼き物ではファン層が違いますよ、全然。

秋山：今は刀剣を展示すると、若い女性が圧倒的に多くなってます。

上西：そうらしいねぇ。昔はねえ、人をいれよう思うたら浮世絵を出したりしとったね。今は来んと思いますけど。

秋山：資料の収集や整理はどのようにされていたんですか。横山（定）課長を中心に今資料の整理をしていますが、開館して五〇年経っていることもあり、なかなか大変な作業になってます。収集の方も、収蔵庫の許容量の問題があったりして…。

取材中の上西節雄先生

上西：僕らおった頃には、寄託をしたいという人がいたら、その中に何点かでも展示可能なものがあったらその何倍も預かったけど。展示可能なものがなければ断るんですけど、なんか一つ二つ良いのがあったらついでに預かったり。

秋山：そういう経緯があるんですか。

上西：文化センターで預かっとったのをそのまま移転いうのもあるからね。そりゃそうと、五〇周年で思い出したんじゃけどタイムカプセルは開けてみた？特別収蔵庫の一番奥にあるんじゃけど。前に鍵を知らんか言われたことがあって。知らんで、僕らヒラの学芸員が持っとるわけない、森田さんに聞いてみい言うたことがあるんやけど。あんなもんニュースにはなるんじゃけど、五〇年目言うたら。もっと短くてもようしとるでしょう、卒業生なんかが。

秋山：先生は見たことはないですか？

上西：入れる時は立ち会ったと思うんじゃけど。何を入れたかはもう忘れた。まあ、当時の新聞とか雑誌とかそんなもん入れた気もするんやけど。

岡崎：入れるものは当時の学芸員さんたちで話し合って？

上西：学芸員じゃないと思う。もうちょっと全体で。

秋山：あれを収蔵庫から出すのが大変だったんです。日通さんが来てかなり苦労されて出しました。

上西：大変といえば、宿直があったんよ、僕らの頃は。正月の三が日も誰かが行かんといかんのですけど、私独身じゃったから、

元日行ったらプラス三千円くれよったですよ。二日が二千円で、三日が千円で。

岡崎：それは館が開いていなくてもお正月も行かないといけないということですか。

上西：そうそう守衛さんだけじゃね、何かあったらいけんから。毎日誰か宿直しよったですよ。

岡崎：守衛さんのお部屋で泊まられてたんですか。

上西：守衛さんの奥の宿直室で。風呂もあって。

秋山：看視員さんの控室かな。

上西：それから、収蔵庫があるでしょ、後楽園の。あそこは天皇陛下が後楽園の中へ泊まられた時に見せる美術品を集めとったわけですけど。その中に「只今」（※備前焼の茶碗）もあったわけです。古陶館なんかは今でも開いとるん？前はおじいちゃんがおってね。警察官あがりの恐ろしい人じゃった。結構学者じゃったなあ。おばちゃんがおって、抹茶なんかも出しよったんですよ、有料で。

秋山：燻蒸庫も最初からあったんですよね。

上西：地下のでしょ、最初からあったよ。結構初めの頃は厳密にあそこで燻蒸して入れよったけどね、古文書とか彫刻とかは。怖いけどね、毒じゃから。

秋山：業者の人に言わせると、当時の燻蒸庫は頑丈で、今じゃあんな頑丈なのはないと言ってました。システムは新しいのに変えたんですけど、燻蒸庫自体は今でも現役で働いています。

上西：県立美術館なんかはまた別の方法でするんじゃけど。とにかく漏れたらいかんから、神経使うなあ。

秋山：毎年メンテナンスしてるんで大丈夫だとは思うんですけど、燻蒸中は落ち着きませんね。さて、話を資料の収集に戻しますが、開館当時は民俗の資料とかも意識して集めている感じだったんですか。

上西：民俗は民芸館みたいに集めるんじゃなくて、製造の過程とか、一から分かるようなものがあれば。特にそういうことを考えて集めましたね。だから、ストーリーが作れるようなものね。この下駄がええじゃろう、この籠がええじゃろういうんで集めてないから。かつて作って使ってた人、今も作ってる人、そういうところに行って、製造用具もすべてもらってきたり。買ったことはほとんどないけど。それからどこにでもある農機具みたいなもんは外して。岡山のこの地域に独特のもんじゃというそういうものを集めんと。もうどこの民俗資料館も一緒じゃあいうんじゃ面白うないから。

秋山：それこそさっきの古物陳列ではなくて歴史的に見て価値があるというものを意識されてたんでしょうね。これがちょうど高度経済成長期の終わり頃だから、そういう意識が高い時期だったのかなと思いました。

上西：そのころ集めてないと既になくなってるものがようけあると思うよ。

秋山：最近、文化財保護法が改正されまして、今後無形民俗文化財

を継承する人がいなくなるとか、そういうのが新しい問題になってますね。ものもそうなんですけど、文化そのものが失われつつある気がします。そういう意味では、いろいろと博物館の役割というのが高まるのでしょうか。

上西：それと行政の方がね、統一感がないというか。県では指定する、あるいは備前市では指定するけども、岡山市では同程度の作家がいても、なかなかそういう風にならなかったり。指定にしてあげたい人とかいるけどね。それになるべきだった人が何人か亡くなってしもうたな。行政の方も施設だけじゃなくて、考えないかんですわ。

岡崎：最後に、教育普及的なことをお聞きしたいんですけど、当時は小学生や中高生に館内を案内して回るといったことは何度か行われていたんですか。

上西：どんなかな。あんまり覚えてないんじゃけど。とにかく人が多かったからね。開館当初はそんなことをせんでも、お客さんがどんどん来てくれとったから。遠足で子どもの団体が来たような覚えはあんまりないんじゃけど。後楽園入るついでに来とったとは思いますけどね。案内した記憶はない。

秋山：館内授業などはあまりしなかったとのことですが、博物館を出て中学校の先生になったとき、急な環境の変化で戸惑ったことはありましたか。

上西：ショックで目の前が真っ白になりました、辞令が出たときは。行ったら行ったで、生徒が「先生、大事な茶碗割ったんか」とか言うしね。専門の本を書いたとか、生徒の目からは何ということもないからね。新採用研修を受けたですよ、二八歳で。一から出直しですね。

秋山：下津井中学校は三年で、その後は県史編纂室ですか。

上西：まあ、県史の方から三好さんが来るように言ってきてくれたので。県史の編纂をすることになるとは思わんかったけどね。県博ぐらいにと思っていたけどそれがなかったから。結果的に、七箇所もの職場を転々とすることになるけど。

秋山：今回は博物館開館当初のことをいろいろと教えていただきましたが、今後ともご指導いただけたらと思います。本日はありがとうございました。

〔上西節雄氏略歴〕
昭和二三年、岡山県に生まれる。昭和四五年、立命館大学文学部を卒業。同年、岡山県立博物館設立準備事務局に配属。翌年の岡山県立博物館開館から昭和五一年まで学芸員として勤務。その後、倉敷市立下津井中学校教諭、岡山県総務部県史編纂室主査、岡山県立美術館学芸課長、倉敷市立美術館長等を歴任。『日本陶磁全集（10）備前』（共著、中央公論社）、『日本のやきもの　備前』（淡交社）など著書多数。

本稿は、令和三年一〇月一三日の対談をもとにしたもので、文中の※印は編集の段階で補足追加した情報を示している。